

## 在日外国人留学生の適応に関する研究(2)

—新渡日留学生の一学期間におけるソーシャル・ネットワーク形成と適応—

田中共子\*・高井次郎\*\*・南 博文\*\*\*・藤原武弘\*\*\*\*

\*広島大学留学生センター \*\*広島大学大学教育研究センター

\*\*\*広島大学教育学部 \*\*\*\*広島大学総合科学部

(1990年10月31日受理)

### A study on the adjustment of international students in Japan(2)

—Implications of social network formation on newly arrived students—

Tomoko TANAKA, Jiro TAKAI, Hirofumi MINAMI and Takehiro FUJIHARA

#### ABSTRACT

Research on cross-cultural adjustment has recently taken on a turn toward focusing on the implications of social networks. This report deals with a study which investigated the roles of social support networks on newly arrived international students in Japan. Eighteen subjects were surveyed at the end of their first academic semester, concerning the structure of their social networks and their adjustment. Cluster analysis and correlations were conducted to determine the relationship between the two variables. It was discovered that in the three month period, subjects had developed relationships in which they could attain mainly practical support, such as information receiving. The amount of support, although relating to subjective judgments on academic progress and their stress coping strategies, was independent of the indices for maladjustment. It can be interpreted that the three month duration was insufficient toward the development of a network that was extensive enough to show any psychological effectiveness in reducing signs of maladjustment, and that these students must rely on themselves toward solution of such problems.

#### 序

日本における留学生の異文化適応に関する研究はこの数年間急激に増加している。この種の研究の初期には日本に対するイメージ研究(岩男, 萩原, 1977)が中心であったが, 近年さまざまな適応目録が開発され(山本ら, 1986; 高井, 1988), また研究方法に関しても縦断研究が主流になりつつある(岩男, 萩原, 1979; ヒックス, 1988; 高井, 1988)。しかし, 海外と比較すればまだ日本の研究の数は非常に少ないといわざるをえない。

在日留学生の研究が今まで積極的に行われていなかった理由には, 日本政府の受け入れの消

極的な姿勢の背景がある。1980年にはわずか6543人（文部省の統計による）の留学生しかいなかった。しかし、中曽根内閣が21世紀初頭を目標とする「留学生10万人構想」を発表してから、この10年間にはその数は31251人にも昇っている（1990年5月現在）。

この急激な増加に伴い、留学生研究はさまざまな学問的観点から必要となり、特に満足度などの留学の評価を分析する心理学的研究の重要性が明らかになっている。留学生の異文化適応をみることによって、日本の留学政策のあり方に対してある種のフィードバック・メカニズムの役が果たされうるのである。留学生のためには多額の費用を国が負担しており、不満をもたせながら個々の留学生を帰国させるとすればかなりの問題があると言わざるを得ない。

海外における留学生の適応研究の全盛期の始まりはおそらくLysgard (1955) からであろう。Lysgardはノルウェーのフルブライト奨学生を対象に、異文化適応の横断的研究を行ない、その課程が当初の幸福感の高い時期から一時的な落ち込みを経て持ち直すといったように、U字型をたどることを提唱した。これに加えて、オバーク (Oberg, 1960) はU字過程の段階別解説を行ない、異文化適応の初期の「ハネムーン」期、中前期の「危機」期、中期の「回復」期、中後期の「適応」期、そして後期の「帰国」期、によって進化すると分析した。1960年代からの研究は留学生の適応に関する個人的資質 (Morris, 1960; Gullahorn & Gullahorn, 1966) に目が向けられ、性格検査との相関が試みられたが、一貫した結果がみられなかった。1970年代からは留学生の友人関係と適応が焦点となり、海外ではこれが現在でも中心的な関心である。特に、留学生が滞在国内の学生と友人関係をもつことによって、その文化をより理解し、適応しやすくなることを実証するための研究が多い。(Ibrahim, 1970; Heath, 1970; Chang, 1973)。この仮説は異文化適応の交流仮説とも呼ばれ、最近ではソーシャル・サポート・ネットワークとストレスを中心に続行されている。ソーシャル・サポートとは周囲の者から受けるさまざまな援助（例えば、情報提供、具体的な助け、感情的な支え、助言提供等）を意味し、それが異文化体験から生起するストレスを緩和する役割を有すると考えられる。留学生におけるサポート・ストレス緩和に関する研究はまだ十分なまとまりをみせないが、一般の大学生を用いた研究はFolkmanとRazarus (1985) を始めかなり展開されている。

日本の場合、前述のように留学生の心理学研究は海外と比べて20年ほど歴史が浅い。高井 (1989) によると、在日留学生の適応問題に関する実証的研究の数はその時点でおよそ12篇しかない。大半が横断的な研究であり、研究間のはっきりした傾向がみつからない。これに重ねて、最近社会学者が留学生のもとに殺到しているため、留学生や大学の留学生担当部局が調査に対して非協力的になっており、大きなサンプルが採りにくくなり、小さな規模の研究にとどまるケースが多い。したがって、意義の高い縦断研究もますます実施しにくくなっている状態にある。このように、日本の留学生研究の短所は明らかであるにもかかわらず、改善するにあたって調査研究環境上の制約が研究を妨げているといえよう。

海外の流れに沿って留学生の適応を対人関係の観点からアプローチした日本の研究は非常に少ない。その中では次のような研究が行なわれている。まず、ヒックス (1988) は異文化適応と受けている援助量に関連づけており、留学生が援助を必要としている場面を「研究」、「人間関係」および「情緒」とし、援助の提供者を「指導教官」、「日本人の知人」、「チューター」および「他の留学生」としている。こうして留学生の受けている援助量とその源泉を縦断的に調査した結果によると、結局日本人よりも他の留学生からうける援助が多い者ほど適応しており、ヒックスの手法が測定できるかぎりにおいては、異文化交流の仮説は支持できなかった。次に、モイヤー (1987) も同じく交流の適応に対する効果に対し否定的な結果をみいだしており、留学生が経験する心理ストレスのうち、対人関係にかかわるストレスが多いことを証拠づけてい

る。最後に、適応の研究ではないが、横田 (1991) は日本人学生と留学生があまり交流していないことに目をつけ、なぜ交流しないのかについて、双方の認知を調べている。おそらく、日本人は留学生の第1次対人関係ネットワークを形成しておらず、道具的な役割をはたしているにすぎないのかもしれない。

しかし、滞在文化を真に理解するためには受け入れ国側の人との交流は欠かせないことである。留学生の友人網に滞在国の人間が多くなれば、より容易にその文化についての情報や直接経験が得られ、より早くその文化を理解できるようになるはずである。一方、留学生が同じ者同志で常に行動しているならば、なかなか直接にその滞在文化を経験できず、また文化学習も進歩しないであろう。いわば、国際交流が実現されていない状態が生ずる。日本の場合、多くの国立大学は留学生専用の「国際交流会館」を設けており、これらの学生寮施設から日本人を完全に締め出しており、その名称にもかかわらず「国際交流」をかえって阻害する現状もある。すなわち、留学生は留学生同志と生活を営み、あまり日本人と接する機会が無い。横田 (印刷中) が指摘するように、日本の大学教育における国際交流は最小限に留まっているに違いない。まして、この問題をとりあげる研究も極めて少なく、留学生を教育すべき大学人の無関心さが窺える。交流仮説が支持されないのは日本の留学制度上の問題にあるのかもしれない。

そこで、本研究は留学生専用宿舎に住む、来日早々の留学生を対象に、彼らの友人関係ネットワークがどのようなものであり、かつその役割すなわちソーシャル・サポートについて検討することを目的とする。また、その特徴から異文化経験からなるストレスに対する緩和作用を調べ、異文化体験におけるソーシャル・サポートのストレス軽減仮説について検討する。

## 方 法

### 1. 調査対象者

平成2年度4月に新渡日して広島大学に入学した留学生の中から、広島大学の留学生用宿舎に居住する学生18名(男性13名、女性5名、平均年齢28.17才、SD = 3.37)を調査対象とした。専攻は、日本語研修コース13名、教育学部研究生4名、工学部研究生1名であった。国籍は、インドネシア5名、台湾4名、マレーシア・フィリピン・ベトナム・パキスタン・トルコ・メキシコ・ペルー・ブラジル・スペイン各1名であった。

### 2. 調査内容

#### (1) ADQ (Adaptation Questionnaire)

日本での留学生活の適応状態と、関連する要因についての質問紙(表1)。フェイスシート部分と、1990年3月に広島大学で実施したLEQ (Living Environment Questionnaire) (田中、高井、神山、村中、藤原、1990)を因子分析して選んだ適応尺度項目からなっている。フェイスシート部分は、性別、年齢、専攻、日本語力、家族、次年度以降の予定、対人的志向性、行動の内外向性、ソーシャル・スキルからなる。適応関連項目としては、日本の留学生活の満足度、来日前と比較した健康状態の変化、不適応症状、孤独感、ストレス、ストレスへの対処、学習成果と心身の健康の評価、海外の人との連絡回数を調べた。

#### (2) SNQ (Social Network Questionnaire)

留学生の日本におけるソーシャル・ネットワークについての質問紙(表2)。まず、日本で大切な関わりのある人を5~10人リストアップし、ニックネーム、イニシャル、実名などの、本人がその人と認識できる何らかの呼び名をあげた。次にその人たちについて性別、年齢、国籍、期待できる援助、関係の満足度、依存度合い、接触頻度、話題、日本に来る前

表1 Adaptation Questionnaire (ADQ)

回答している本人について

• 性 別	
• 年 齢	
• 大学での専攻	
• 独身・既婚	
• 来年度の予定	①研究生 ②博士過程 ③修士過程 ④帰国
• 健康状態	①かなりよい ~ ⑤かなり悪い
• 日本語力	①上級 ~ ③初級
• ソーシャル・スキル	①日本人と同様に行動できる ②日本人の行動をだいたい理解できる ③よくわからないことが多い
• 対人志向性：a. 本国で友人が	①多い方だった ②少ない方だった
b. ①家で静かにしているのが好き	②外で活動するのが好き
• 海外の人との連絡回数	①1回以下 ②2~4回 ③5~9回 ④10回以上
• 満足感	①たいへん満足 ~ ⑤まったく満足でない
• 不適応症状：a. ホームシック	b. 不安 c. 胃腸など身体の不調
	①全く感じない ~ ④たいへん感じる
• 健康の変化	①かなりよくなった ~ ⑤かなり悪くなった
• 孤独感	①けして感じない ~ ④しばしば感じる
• うまくいっている度合：a. 勉強	b. 身体的健康 c. 精神的健康
	①かなりよい ~ ④かなりよくない
• ストレス：a. 日本人の話題の理解	b. 日本人との人間関係
	①全く感じない ~ ⑤非常に感じる
• ストレス対処方略：a. 願望変更	b. 気晴らし c. 泣く・日記に書く
	①まったくしない ~ ④よくする

にその人を知っていたか、広島に住んでいるかを尋ねた。

### 3. 手続 き

日本での最初の一学期間における、ソーシャル・ネットワークの形成と適応状態を調べるため、7月の一学期が終了する直前の時期を選んだ。1990年7月中旬に、被験者に調査用紙及び調査の目的とやり方を書いた紙を渡して協力の同意を得、数日以内に記入済みの用紙を回収した。調査のお礼に小さな文具を渡した。質問用紙は、バックトランスレーションを用いて日本語-英語の対応性のチェックを行った上で、日本語または英語版を用意した。回収率は100%であった。

### 4. 分析方法

適応状態については、個人の回答を集計し、ソーシャル・ネットワークの構造については、得られたネットワーク構成者についての評価を集計した。次に、個々人のネットワークの構成・評価と、適応の心理的反応に関する項目をあわせクラスター分析を行なった。また項目間の

表2 Social Network Questionnaire (SNQ)

日本における本人にとっての重要な人たちそれぞれについて

• 年 齢	① 20 才以下	② 20 ~ 30 才	③ 30 ~ 40 才	④ 40 才以上
• 性 別				
• 国 籍	① 同国人	② 他の外国人	③ 日本人	
• 関 係	① 指導教官	② 他の教職員	③ 研究室の学生	
	④ チューターの学生	⑤ 他の学生	⑥ 日本にいる家族	
	⑦ 日本にいる親戚	⑧ ホストファミリー	⑨ 他の友人知人	
• 期待できる援助:	a. 日本語	b. 日本文化	c. 勉強	d. 相談・励まし
	e. 楽しむ・出かける	f. 物・お金	g. 生活に必要な情報	
	① 期待できる	② どちらとも言えない	③ 期待できない	
• その人との関係の満足度				
	① たいへん満足	② やや満足	③ 満足ではない	
• 自分と相手とどちらがより頼りにしているか				
	① 自分	② 同じ	③ 相手	
• 接する回数	① 毎日	② ~週 1 回以上	③ ~月 1 回以上	
	④ ~3 ヶ月に 1 回以上	⑤ それ以下		
• 話 題:	a. 個人的なこと	b. 一般的なこと		
	① 話す	② 話さない		
• 知りあった時期	① 来日前	② 来日後		
• 居 住 地	① 広島	② 広島以外		

相関を求め、項目間での正負の影響方向を確認した。そして関連の深い項目をグループにまとめて、合計得点でグループ間の相関を求めた。さらにこれらに項目に回答した被験者についてクラスター分析を行ない、文化圏によって回答が類似するかどうかを検討した。また、ソーシャル・サポートの機能を検討するために、援助と適応などの心理的反応の項目の相関係数をもとめ、その有意性の検定を行った。

## 結果と考察

### 1. 調査対象者の特性および適応の状態

デモグラフィックな要因として、図 1-a に性別、図 1-b に年齢、独身・既婚の別を図 1-c、アカデミックの予定を図 1-d に示した。滞在予定は数年に及ぶものが多いので、学問的な動機付けや日本適応への関心などは高いと思われるが、日本語力はまだ不十分とした者が多い(図 2)。ソーシャル・スキル、対人行動上の志向性は、図 2-b および図 2-c, d に示した。

適応尺度項目としては、本人の満足感を図 3-a に示した。孤独感を全く感じない者は 16%のみである(図 3-b)。健康の悪化した者は 1 割いる(図 3-c)。不適応症状はホームシック、不安、体調不良の順に自覚され易い(図 3-d)。体や心の健康に不安を感じる者もわずかながらおり、勉強の達成度は 34% が良くないと思っている(図 3-e)。また生活より対人関係のストレスが高い(図 3-f)。ストレスへの対処方略は図 3-g に示した。

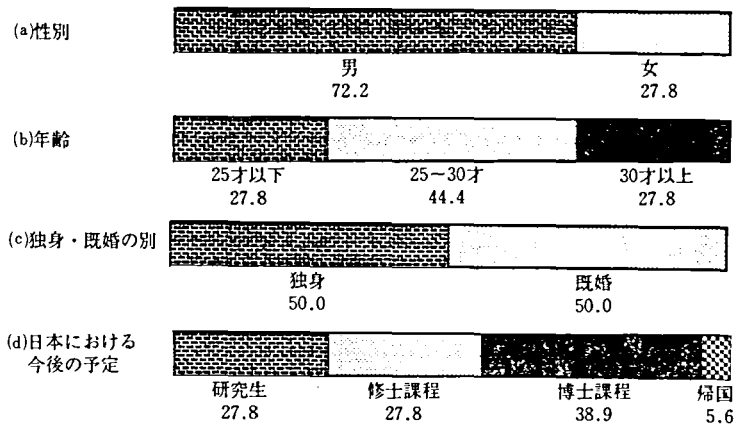


図1. 調査対象者に関するデモグラフィック・データ 数字は%を表す

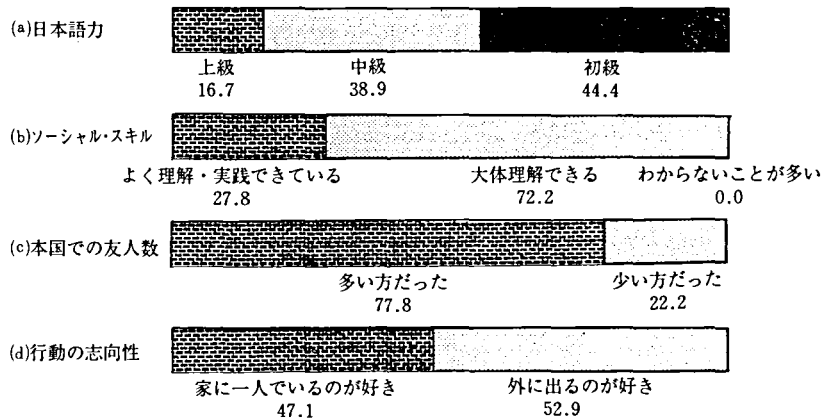


図2. 調査対象者による自己評価 数字は%を表す

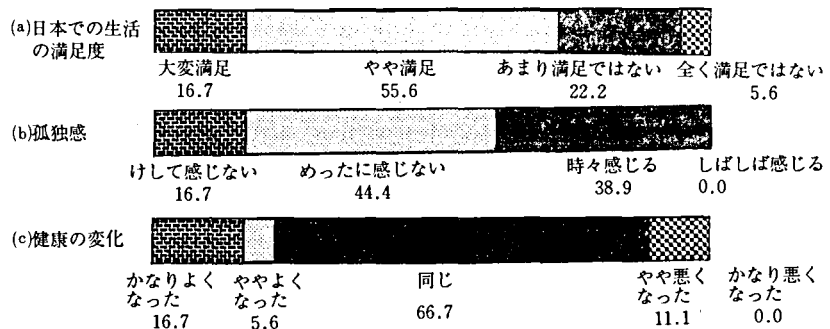


図3. 調査対象者による適応評価 数字は%を表す

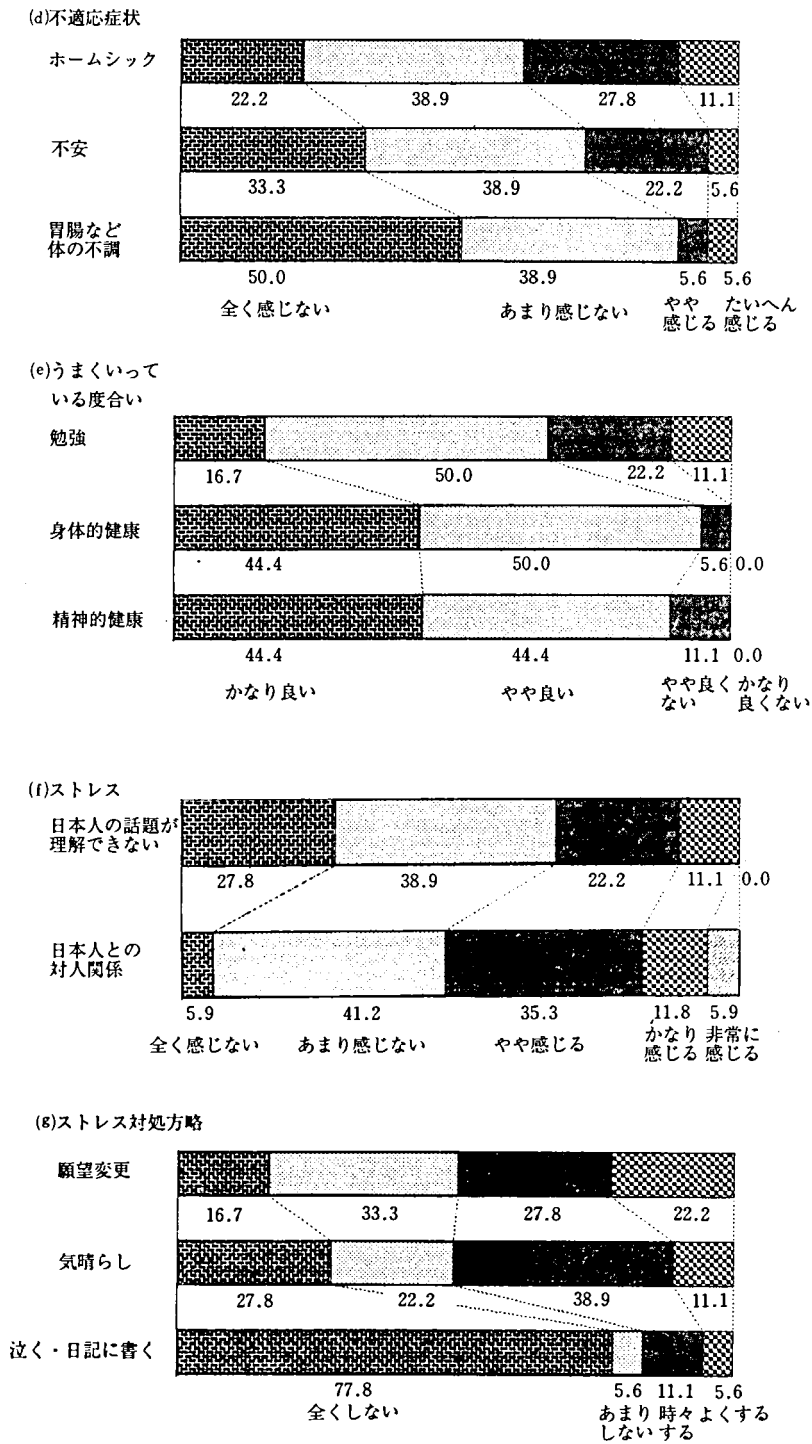


図3. つづき

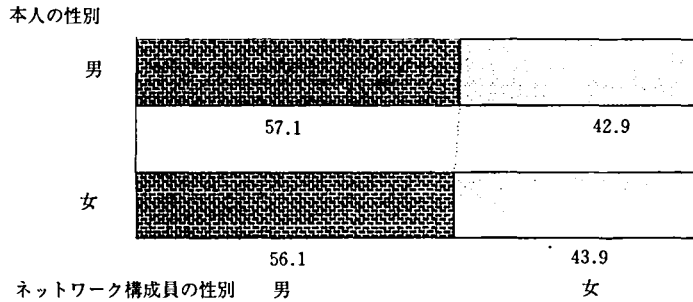
2. ソーシャル・ネットワークの構造

4月に来日した留学生が、日本における最初の一学期間に作り上げた対人関係網の構造は、次のようなものである。重要な人として上げられたのはのべ140人、一人あたり7.78人であった。本人の性別と関係なく、男性が半数余りを占めている（図4-a-1、図4-a-2）。10代との関係は少ないが、30代の学生の方が相手の年齢にやや幅がみられる（図4-b-1、図4-b-2）。国籍別では、半数あまりが日本人、次いで約3割が同国人、残りが他の外国人であった（図4-c-1）。日本人の男女比は約半々である（図4-c-2）。関係では、学生や学外の友人知人が各それぞれ3割と多い（図4-d）。ヒックス（1988）は、チューターはあまり期待されず貢献も少ないことを明らかにしたが、今回の調査でも、チューター学生よりホストファミリーの方が関わりのある人として多くあげられている。接触頻度は図5-aに示した。広島に来る前から知っていた人が約2割いる（図5-b）。約9割は広島に住む（図5-c）。相手を頼る関係の方が多い（図6-a）。話題、関係の満足度合いは図6-a,bおよびcに示した。

(a-1) ネットワーク構成員の性別



(a-2) 本人の性別によるネットワーク構成員の性別



(b-1) ネットワーク構成員の年齢比

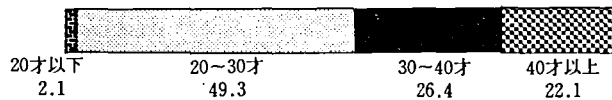
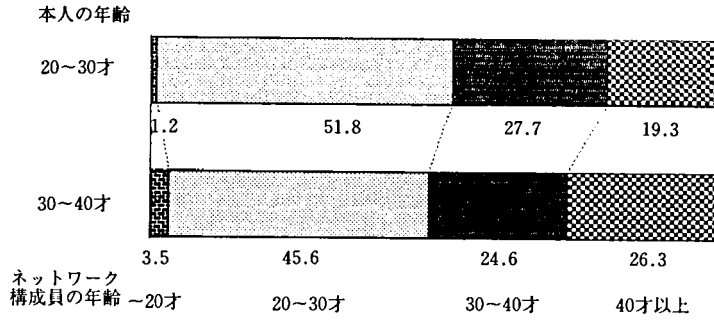


図4. ネットワーク構成員に関するデモグラフィック・データ

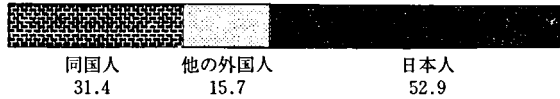
数字は%を表す



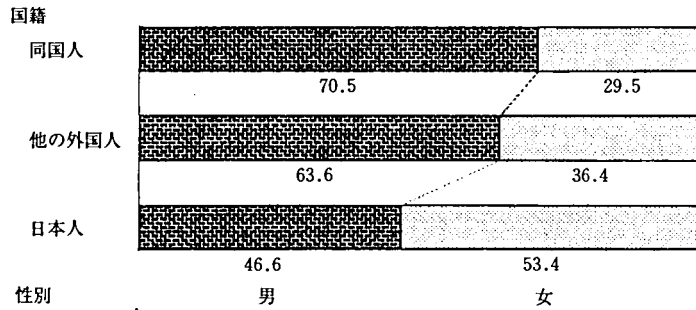
(b-2) 本人の年齢によるネットワーク構成員の年齢比



(c-1) ネットワーク構成員の国籍比



(c-2) 国籍によるネットワーク構成員の性比



(d) 調査対象者との関係

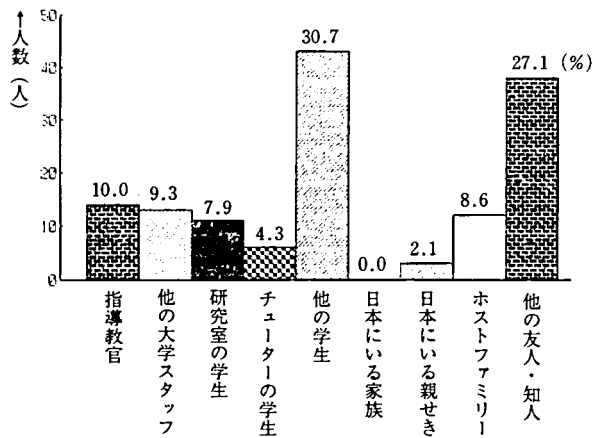
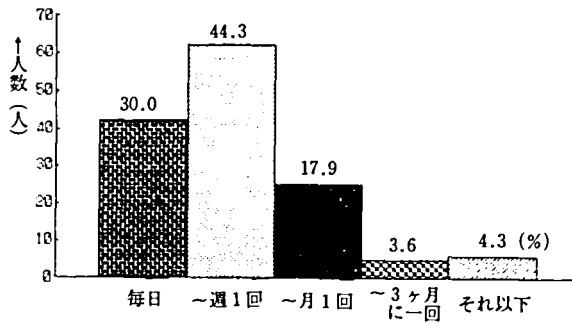
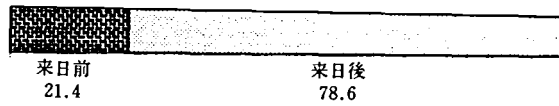


図4. つづき

(a)接触頻度



(b)知りあった時期



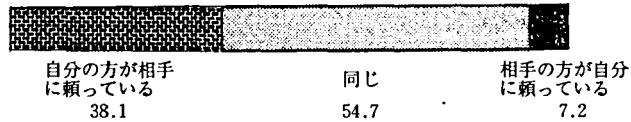
(c)居住地



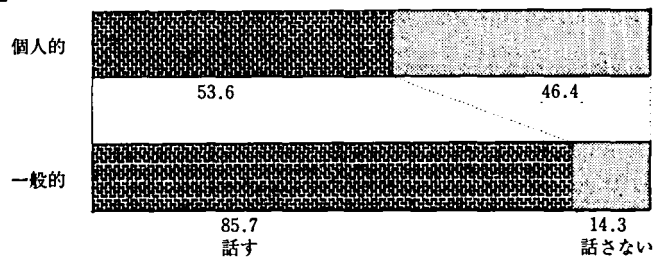
図5. 調査対象者とネットワーク構成員との関係の持ち方

数字は%を表す

(a)依存関係



(b)話題



(c)関係の満足度



図6. ネットワーク構成員との関係に対する調査対象者の評価

数字は%を表す

上述した人たちから受けられると期待できる援助の分布を、図7-aに示す。日本語、楽しむ、相談、情報、日本文化の援助は比較的受け易いが、勉強、物・お金の援助はそれより受けにくい。日本に関することや情報を日本人から、物・お金を同国人から援助される傾向がある(図7-b)。FurnhamとBochner(1982)は、外国人とは楽しみを中心としたつながりを形成するとしているが、ここではその機能は明らかではない。学外の人とは、物・お金、楽しむ、日本文化などを重視した関係を持っている(図7-c)。海外からのサポートを反映するものとして、図8に手紙や電話などを含む海外との接触頻度を示した。友人より家族と頻繁に連絡している。

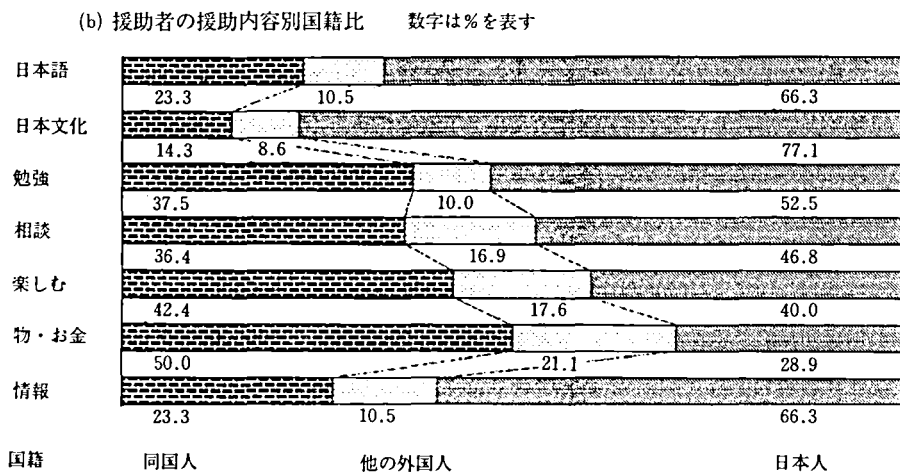
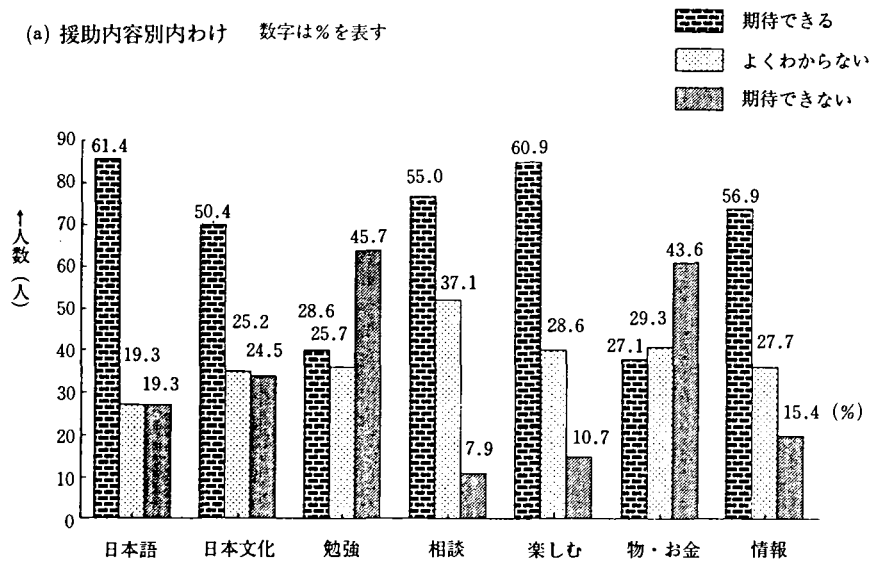


図7. 期待できる援助 数字は%を表す

(c) 援助者の援助内容別本人との関係比 数字は%を表す

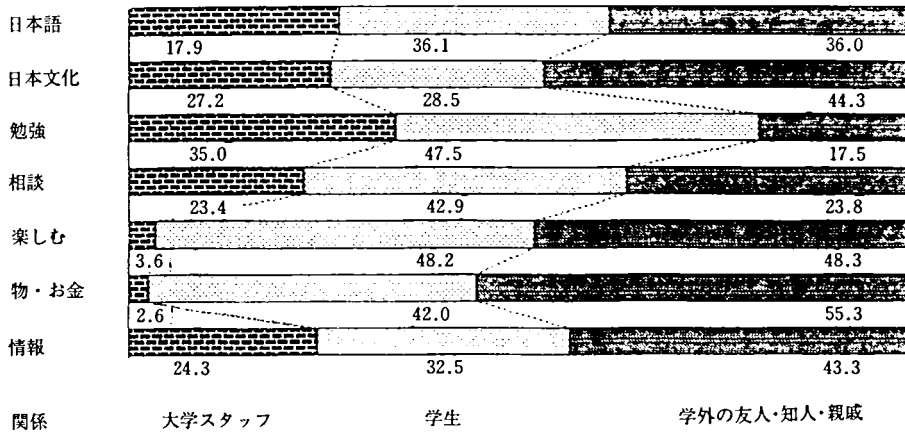


図7. つづき

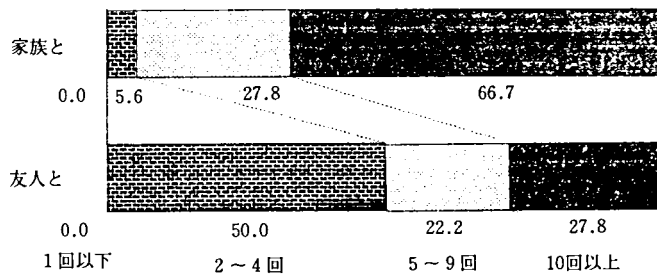


図8. 海外の人との一学期間の連絡回数 数字は%を表す

### 3. 調査項目のクラスター分析

ネットワークと心理的反応に関わる調査項目と、調査対象者についてそれぞれクラスター分析した結果を次に述べる。得点換算方法として、援助については各領ごとに期待できる人数を合計し、話題は話す場合のみ1点とし、接触頻度は高い順に5~1点、依存は相手が大・同じ・自分が大の順に-1, 0, +1点とした。新知人率と広島在住率は、それらの人が全人数に対して占める割合を、0.0~1.0の数値で表した。その他の適応状態に関する項目は、1~4などの回答に用いた数値を得点とした。分析にはウォード法、メジアン法の他に、最近隣法、最遠隣法、群平均法、重心法なども試みたが、結果が比較的明瞭であった始めの2つを取り上げた。

#### (1) 心理的反応に関する調査項目の分析 (図9-a, b)

まとまりを示したのは、①接触頻度や依存、友人連絡、期待できる援助など「援助」関係の項目、②日本語や日本文化など「日本」関係の項目、③ストレスや不安、勉強成果や満足感など、「不適応」関連の項目、④その他、対人関係の志向性や孤独感、主観的反応、身体的反応などであった。援助に関係する①②をまとめて3つのクラスターと見てもよいであろう。その3つのクラスターごとに得点を総合したところ、それらの間に有意な相関は見いだ

せなかった。援助とストレスが独立しているということは、サポートによるストレス緩衝作用が想定できないことになる。

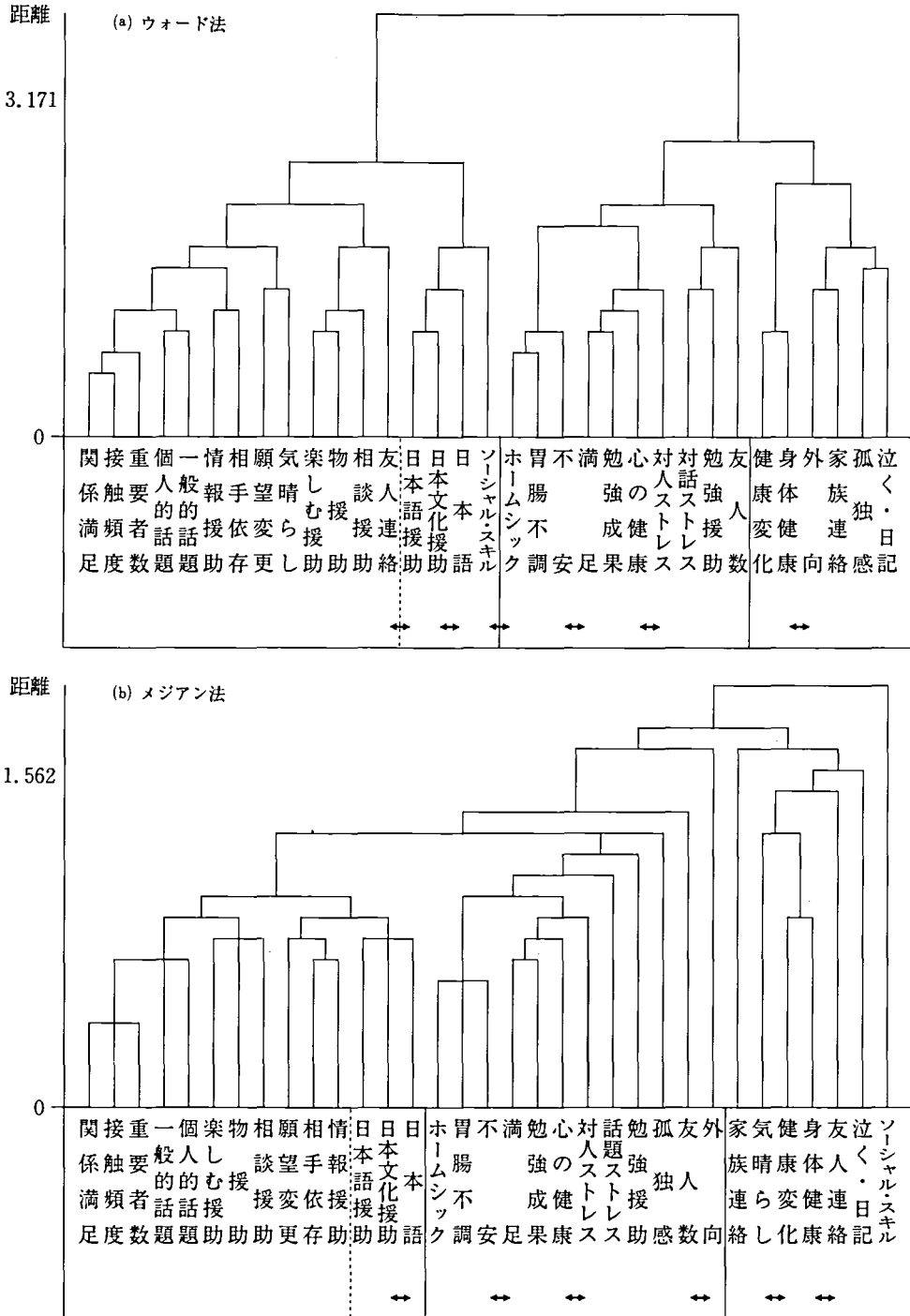


図9. 心理的反応のクラスター分析

隣りあう項目間で、⇔は負（逆方向に変化）、それ以外は正の関係にあることを表す  
囲みの中は同一クラスターであることを示す

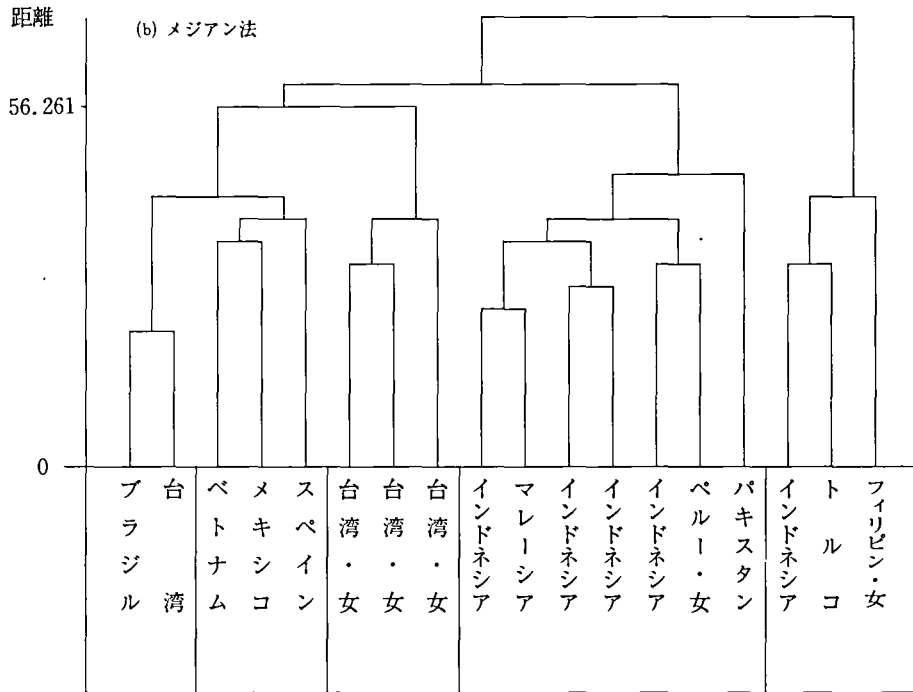
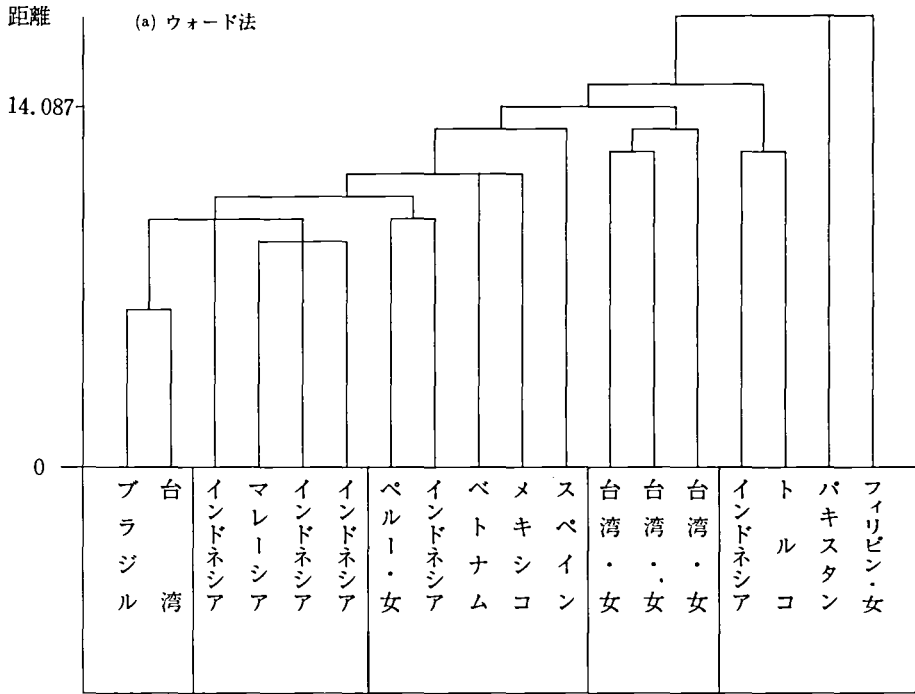
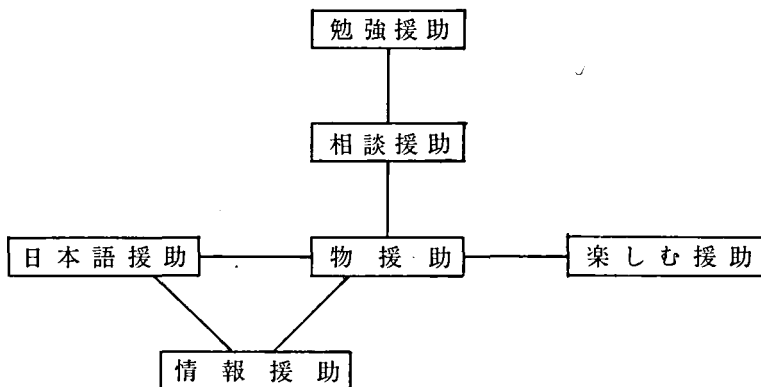


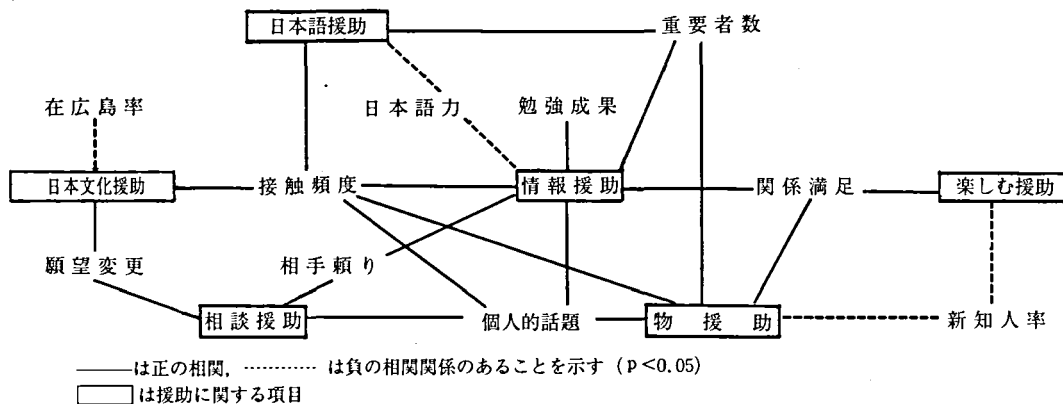
図10. 調査対象者のクラスター分析

女とあるのは女子，他は男子を表す 囲みの中は同一クラスターであることを示す



——は正の相関関係のあることを示す (p<0.05)

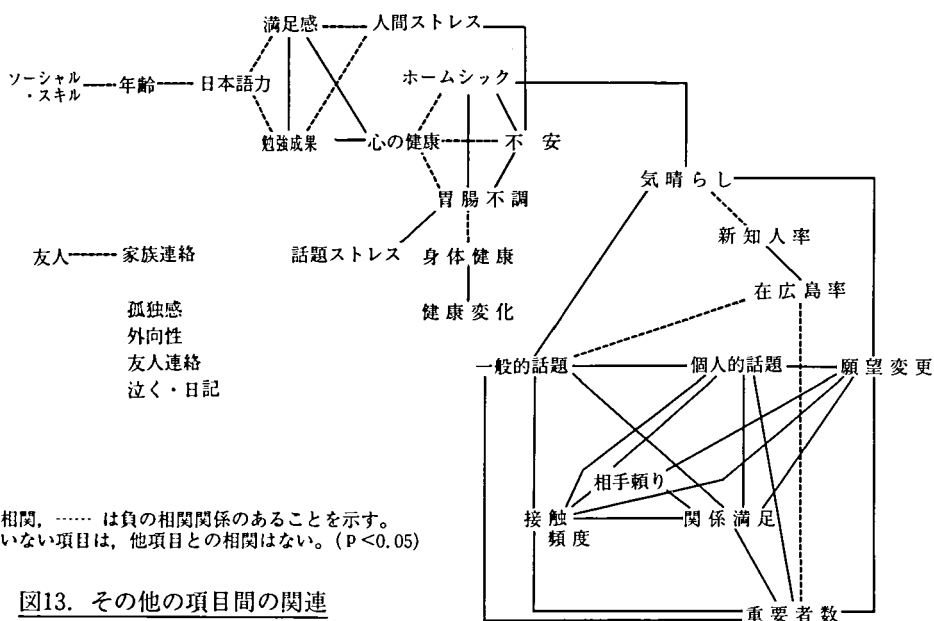
図11. 援助項目間の関連



——は正の相関, ..... は負の相関関係のあることを示す (p<0.05)

□ は援助に関する項目

図12. 援助とその他の項目の関連



——は正の相関, ..... は負の相関関係のあることを示す。  
つながない項目は、他項目との相関はない。(p<0.05)

図13. その他の項目間の関連

## (2) 調査対象者の分析 (図 10 - a, b)

標準化したデータを用いた分析結果を示す。台湾女性、ラテン系、インドネシア系あるいは東南アジア系、などのまとまりがみられる。ベトナム男子とラテン系、台湾男子とブラジル男子は類似の反応をしている。フィリピン女子とパキスタン男子は比較的離れている。文化圏ごとの類似性がクラスター分析によって見いだされたことは、この方法が異文化への適応研究において、有益な手法となりうることを示唆している。

ウォード法による項目のクラスター分析結果をもとに、上述のグループ別に援助と不適応の総合得点を算出したが、その間に有意な相関は見いだせなかった。国籍別に、受け易い援助や陥り易い不適応があるかどうかは、さらに大きいサンプルでの検討を要するといえよう。

## 4. ネットワークと適応の関連

ネットワークと心理的反応を測定した項目間で相関係数を算出し、5%水準で有意であった関係について示す。

## ① 援助項目間の関連 (図11)

物・お金の援助と他とのつながりが多く、これがあれば他の援助も受けているという意味で、援助の指標あるいはネットワークの広さの反映かもしれない。また、物・お金や情報、日本語といったプラクティカルな援助は関連しあっている。ネットワークは適応に伴って分化していく (Kelly, 1955) とすれば、今後この項目間の相関は少なくなることが予想される。

## ② 援助とその他の項目の関連 (図12)

情報援助が勉強成果や関係の満足と正の相関を持ち、他にも多くの項目とつながっていることは、この時期における道具的援助の重要性を示している。この意味で広いネットワークの構築は有効といえよう。相談援助は、現実の理解や現実にあう願望の修正につながる可能性がある。情報、楽しみ、物質的援助が得られることが関係の満足に関係している。前から知っている人からのほうが、楽しみや物質的援助を受け易く、新しい関係の人はこの点を交代するに至っていない。ホームシックなどの不適応症状とのつながりはみられない。すなわち異文化適応のストレスの緩和に関する援助の効果はここでは確認されない。援助は、接触頻度や重要者数といった人間関係の量的な発展にはつながっていても、心理的なマイナス面のカバーができるほどには関係が成熟してないのであろう。内面的な問題にはまだ一人で対処しているであろうことは、この時期の問題点として指摘できる。

## ③ その他の項目間の関連 (図13)

不適応関連の項目は互いに相関があり、心の問題を持つとあらゆる面でそれが出てくることを示している。図の右下は、人間関係についてのまとまりである。不適応症状と人間関係の間で関連があるのは、ホームシックと気晴らし、接触頻度と勉強成果の2つのみである。心身のストレス症状は人間関係網の確立とは比較的独立している。不適応症状は、日本語力や年齢といった、デモグラフィック要因とも関連している。また、孤独感、対人的志向性、友人連絡、などは不適応症状とは関連してなかった。

サポートと適応について、以下に述べる。周囲の人から受けるさまざまな援助すなわちソーシャル・サポートは、ストレスのバッファーとなって、ストレス事態ひいては日常生活におけるメンタルヘルスの維持に重要な役割を果たすことが知られている (スコット, 1989)。Fontaine (1986) は、異文化でのサポートの役割について、ストレスの緩和と異文化での課題に対する有効な対処が含まれると述べている。Coehlo, Yuan と Ahmed (1979) は、情報の獲得や行動リハーサルの機会を提供するとしている。サポートのポジティブな作用は、おもに駐在員やその家族、移民の研究で確認されている。自助グループの存在は異文化におけ



る事態に有効な対処方略を引き出し、あるいは精神的な支えとなって適応に有益である (Killilea, 1976)。海外勤務の軍人家族では、サポートが多い家庭ほど心の問題が少ない (Fanning, 1967)。そして Amarasingham (1980) や, Fontaine と Dorch (1980) は、異文化における良質の体験と個人の成長にとって、親しい関係を築くことの重要性を示唆している。また異文化での友情の形成は満足感を高める (Rivers and Fontaine, 1979) という指摘もある。

サポートの機能に関する上記の仮説に従えば、サポートと適応項目との間に正の相関が期待される。しかしながら今回は、援助量と不適応症状とは比較的独立している。この結果を解釈する可能性の一つは、この結果がこの時点における関係の成熟の様相を反映していることである。すなわち、情報援助を中心とした道具的サポートを優先した人間関係網が作られてきたものの、心理的な深い関わりがまだ希薄であると考えられる。反応パターンが文化圏により類似していたことも、個人個人の適応パターンがまだ未発達なためかも知れない。

大学新生生のネットワークの時期的変化について古川ら (1983) が調べたところ、日本の大学では、新生が新しい大学環境において安定したネットワークを構成するには、数ヶ月を要したという。今回の調査は3ヶ月余りが経過した時点のものであり、日本人でも不十分なネットワークしかできない時期である。留学生にとっては、ネットワーク形成はさらに困難であろう。Furnham と Bochner (1982) が英国内の留学生の社会的困難を調べたところ、最も困難であったのはその国の人との人間関係の確立とその維持であったという。すなわち、受け入れ国のメンバーを含めた異文化における人間関係網の確立は、心理的な適応への有益な機能でありうると同時に困難な課題でもある。サポートの拡充が進展しにくく、関係性維持のためのストレスが加わるといったことは異文化におけるサポートの効用を確認しにくくしていると思われる。

しかしながら、時期的経過とサポートの機能の変化について検討した Hays と Oxley (1985) は、大学新生を4, 8, 12週間に渡って調べた結果、ネットワーク内の学生数は全ての時期で適応と有意に関連していたという。特に、12週間後ではネットワークのサイズが広い方が適応がよいという。今回の重要者数は、援助量や人間関係の進展には関係するが、適応や不適応に相関はみいだせなかった。さらに、山本ら (1985) は、日本人留学生のアメリカ適応とそこでのネットワークを9ヶ月間調べた結果、援助関係が適応過程に影響を及ぼすのは1年にわたる留学期間の特に前半で、後半には顕著な影響力を持たなかったという。前半は援助により直接解決できる問題が多いが、後半では研究上の課題など自分で対応すべき課題が増えるためだとしている。時期が進むにつれて適応の課題が変化していき、それにあった援助を受けることが必要になるのであろう。今回の結果からは、ネットワークは拡充しつつあると考えられ、達成や満足感、精神的健康といった適応に資するのは今後のネットワークの質的発達によるといえよう。

また、ネットワークの構造や発達には文化的条件が関与している。たとえば、日米の大学生のネットワークを比較して南ら (印刷中) は、日本では「ヨコ」より「タテ」の関係が、頼られるより頼る関係が、そして時空間において広い範囲より現在を中心とした関係が多く挙げられ、相手の固定的属性 (年長者であるなど) や物理的条件 (近くに住むなど) に規定されやすいという。国によって必要とされるネットワークも異なると考えられる。日本における適応に日本でのサポートの役割を特定して調べることに、日本適応上の意義がある。

今後は、どういった時点のどのような構造のサポートが適応へのポジティブな効果を持つのかを、さらに明らかにしていく必要がある。それが日本への適応をスムーズにする要因、

ひいては適応訓練の方略の手がかりを提供していくと考えられる。

## 引用文献

- Amarasingham, L. R. 1980 Making friends in a new culture: South Asian woman in Boston, Massachusetts. In G. V. Coello and P. I. Ahmed (Eds.), *Uprooting and development: Dilemmas of coping with modernization*. New York: Plenum Press.
- Chang, H. B. 1973 Attitudes of Chinese students in the United States. *Sociology and Sociological Research*, 58, 66-77
- Coelho, G. V., Yuan, Y. T. and Ahmed, P. I. 1980 Contemporary uprootings and collaborative coping: Behavioral and societal responses. In G. V. Coelho and P. I. Ahmed (Eds.), *Uprooting and development: Dilemmas of coping with modernization*. New York: Plenum Press.
- Fanning, D. M. 1967 Families in flats. *British Medical Journal*, 4, 382-386
- 古川雅文, 藤原武弘, 井上弥, 石井眞治, 福田廣 1983 環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発生的研究 心理学研究, 53, 330-336
- Folkman, S. and Lazarus, R. S. 1985 If it changes it must be a process: Study of emotion and coping during three stages of a college examination. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 150-170
- Fontaine, G. 1986 Roles of social support systems in overseas relocation: Implications for intercultural training. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 361-378
- Fontaine, G. and Dorch, E. 1980 Problems and benefits of close intercultural relationships. *International Journal of Intercultural Relations*, 4, 329-337
- Furnham, A. and Bochner, S. 1982 Social difficulty in a foreign culture: An empirical analysis of culture shock. In Bochner, S. (Ed.), *Culture in Contact*. Oxford: Pergamon Press
- Gullahorn, J. T. and Gullahorn, J. E. 1966 American students abroad: Professional and personal development. *The Annals*, 368, 43-59
- Heath, C. L. 1970 Foreign students attitudes at International House, Berkeley. *International Educational and Cultural Exchange*, 5(3), 66-70
- Hicks, J. E. 1988 Studies on the adjustment of foreign students in Japan: With focus on interpersonal relations. Doctoral dissertation, Faculty of Education, Hiroshima University.
- Ibrahim, S. E. M. 1970 Interaction, perception, and attitudes of Arab students towards Americans. *Sociology and Sociological Research*, 55, 29-46
- Kelly, G. 1955 *The psychology of personal constructs*. New York: W. W. Norton and Co.
- Killilea, M. 1976 Mutual help organizations: Interpretations in the literature. In G. Caplan and M. Killilea (Eds.), *Support systems and mutual help: Multidisciplinary explorations*. New York: Grune & Stratton.
- Lysgard, S. 1956 Adjustment in a foreign society: Norwegian Fullbright grantees visiting the United States. *International Science Bulletin*, 7, 45-51
- 南博文, 山口修司 大学生活への移行 山本多喜司, シーモア・ワブナー (編) 人生移行の発達心理学 北大路書房 (印刷中)
- Morris, R. T. 1960 *The Two-Way Mirror*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Oberg, K. 1960 Culture shock: Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177-182
- Rivers, N. M. and Fontaine, G. 1979 Friendships with Whites and status as predictors of Black student satisfaction with an integrated university. *International Journal of Intercultural Relations*, 3, 327-331

- スコット, P. M. (宮城薫翻訳) 1989 ソーシャル・サポート 中川米造, 宗像恒次 (編) 医療・健康心理学 福村出版
- 田中共子, 高井次郎, 神山貴弥, 村中千穂, 藤原武弘 1990 在日外国人留学生の適応に関する研究(1)- 異文化適応尺度の因子構造の検討-広島大学総合科学部紀要Ⅲ, 14
- 山本多喜司 (代表) 1985 異文化環境への適応に関する環境心理学研究 昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 横田雅弘 1989 なぜ日本人と留学生は親しくなりにくいのか 日本心理学会第53回大会発表論文集

---

本研究の一部は、松下国際財団1990年度(第一次)研究助成(「アジア系留学生の異文化適応促進のためのソーシャル・スキル・トレーニング」代表者 藤原武弘)の援助を得て実施された。